

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：14401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652138

研究課題名(和文) 地域的視点導入によるウルドゥー語・ヒンディー語文法教育の改善に関する研究

研究課題名(英文) A Study in Improving the Education of Urdu and Hindi Grammar by Introducing Regional Aspects

研究代表者

松村 耕光 (Matsumura, Takamitsu)

大阪大学・言語文化研究科(研究院)・教授

研究者番号：60157352

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：ウルドゥー語、ヒンディー語の地域的言語実態を検討し、その成果を両言語の文法教育に導入することによって、両言語の地域的言語実態を考慮することなく行われている現在の両言語の文法教育を改善することが本研究の目的である。今回の研究では、地域的言語実態と現在の文法教育との間に特に大きなずれが生じていると思われる、不定詞と特殊動詞chahiyeの用法に関して、標準語の中心とされるデリーや標準文法とは異なった文法を持っていると考えられている東部地域において調査を行った。その結果、文法規範意識に非常に大きな個人差のあることが確認された。

研究成果の概要(英文)：The current Urdu and Hindi education has paid little attention to their regional and actual usages. The purpose of this study is to overcome the situation by introducing important regional and actual usages to the education. In order to do so, the research had been carried out on the regional and actual usage of the nominal infinitive and the special verb chahiye in Delhi, where standard Urdu and standard Hindi are considered to be spoken, and major eastern Urdu and Hindi cities, where, according to some grammarians, the grammar is different from the standard one. The results of this investigation showed individual variety in the usage of the nominal infinitive and the special verb chahiye.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：ウルドゥー語 ヒンディー語 外国語教育 不定詞 一致

1. 研究開始当初の背景

(1) ウルドゥー語、ヒンディー語の現在行われている文法教育は日本においても他の地域においても、両言語の言語実態に即して行われているとは言い難い状況にある。

(2) 両言語とも、デリーが歴史的に文化の中心であったためにデリーの文法を理念的には標準としてきたが、独立後の文化・言語状況の激変により、デリーは言語的優越性を主張できない状態になってきているように思われる。

(3) デリーの言葉自体が変化し、デリー以外の地域の言葉が自己主張するようになってきていると思われる現在、日本におけるウルドゥー語、ヒンディー語の文法教育にはそのような変化に対応する必要が生じていると言わなければならない。

2. 研究の目的

(1) 標準ウルドゥー語、標準ヒンディー語の中心都市とされるデリーや両言語の他の中心都市で用いられている両言語の文法上の言語実態を調査し、現在用いられている文法書との異同を確認し、日本における両言語の文法教育の改善を図る。

3. 研究の方法

(1) ウルドゥー語、ヒンディー語の、現在よく用いられている文法書の説明と一致していないと考えられる文法項目について、標準語の中心的都市と通常考えられているデリーおよび特に際立った地域的文法的特徴を持っていると考えられている東部地域(ラクナウー、アラハバード、パナールス、パトナ)において聞き取り調査を行う。

(2) 上記のような文法項目について、インドのウルドゥー語学科、ヒンディー語学科、その他の語学研究機関の教員や研究員から最新の情報を収集する。

(3) 上記のような文法項目について、これまで書かれたウルドゥー語、ヒンディー語の入門書、文法書を精査する。

4. 研究成果

(1) ウルドゥー語、ヒンディー語の、文法書の説明と言語実態とが一致していないと考えられる文法項目の一つに不定詞の名詞用法が挙げられる。

(2) ウルドゥー語やヒンディー語の動詞の不定形はそのままの形で名詞となる。たとえば、「読む」という動詞 *parhna* はそのままの形で「読むこと」という意味の不定詞=男性単数直格の名詞になる。不定詞は語尾変化し、*parhne* と語尾が *e* になると、男性複数直格、男性単数斜格、*parhni* と語尾が *i* になると女性単直格の名詞となる(直格は後置詞を伴わない時の格、斜格は後置詞を伴う時の格であり、現在では、上記以外の形は認められていない)。不定詞の語形を図示すると次のようになる。

a 語尾	男性単数直格
e 語尾	男性複数直格 男性単数斜格
i 語尾	女性単数直格

(3) 動詞が自動詞の場合、*wahan jana* 「そこに行くこと」のように不定詞は男性単数形となるが、動詞が他動詞の場合、不定詞は、後置詞 *ko* (「を」を意味する後置詞) を伴わない直接目的語に性数が一致して変化すると大部分のウルドゥー語、ヒンディー語文法書に記されている。たとえば、「雑誌 (*risalah*)」は男性名詞であるので、*ek risalah parhna* で「一冊の雑誌を読むこと」という意味になる。直接目的語が「2冊の雑誌 (*do risale*)」と男性複数になると *parhna* はそれに性数一致して *parhne* と変化し、*do risale parhne* で「2冊の雑誌を読むこと」を表す。同様に、直接目的語が「本 (*kitab*)」のように女性名詞の場合、「一冊の本を読むこと」という場合には、*ek kitab parhni* と、不定詞は女性単数語尾の *i* となる。「2冊の本を読むこと」という場合にも、*do kitabeḥ parhni* と、不定詞は *parhni* という女性単数形となる。不定詞の女性複数形は用いられておらず、直接目的語が女性複数の名詞であっても女性単数形を用いることになっている。

(4) 以上がウルドゥー語、ヒンディー語の不定詞の使用原則であるが、実際には、会話においても文献においても、この通りに使用されていない例が数多く見受けられる。

(5) ウルドゥー語、ヒンディー語の不定詞は、

例文(イ) *Yeh risalah parhna zaruri hai.*
「この雑誌(単数)を読むことが必要だ」のように、不定詞が、文法上の主語かつ意味上の主語となっている場合、

例文(ロ) *Ap ko yeh risalah parhna hai.*
「あなたにはこの雑誌(単数)を読むことがある」=「あなたはこの雑誌(単数)を読まなければならない」

のように、不定詞が、意味上の主語ではないが、文法上の主語になっている場合、

例文(ハ) *Ap yeh risalah parhna chahte haiḥ.*

「あなたはこの雑誌を読むことを欲している」=「あなたはこの雑誌を読みたいと思っている」

のように、不定詞が動詞の目的語になっている場合などがある。

(6) 今回の研究では、上記例文 2 番目の例文(ロ)の、「～しなければならない」という意味を表現する構文、すなわち、不定詞が文法上の主語ではあるが意味上の主語にはなっていない構文を中心にして、ウルドゥー語話者、ヒンディー語話者の文法規範意識を調査した。

(7) ウルドゥー語およびヒンディー語では、「Sは～しなければならない」という文は、
構文 a. 「Sには～することがある」
構文 b. 「Sに～することが降りかかる」

構文 c. 「S には ~ することが必要である」などという構文で表現される。いずれの構文においても意味上の主語は S で、文法上の主語は「~ すること」という不定詞である。

(8) 上記 a, b, c の構文において、不定詞が自動詞の場合、不定詞は男性単数直格 (a 語尾) で、動詞は不定詞に一致して男性単数形となる。たとえば、「行く」という意味の動詞 *jana* の不定詞が使われた場合は、以下のようになる。

構文 a. *Āp kō wahañ jana tha.*

「あなたにはそこに行くことがあった」、すなわち、「あなたはそこに行かなければならなかった」。動詞は不定詞 (男性単数名詞) *jana* に一致して、男性単数形の *tha* になっている。

構文 b. *Āp kō wahañ jana para.*

「あなたにそこに行くことが降りかかった」、すなわち「あなたはそこに行かなければならなかった」。この場合も動詞は不定詞に一致して男性単数形 *para* となっている。

構文 c. *Āp kō wahañ jana chahiye tha.*

「あなたにはそこに行くことが必要だった」、すなわち「あなたはそこに行かなければならなかった」。この構文でも動詞は男性単数形の *chahiye tha* になっている。

(9) 他動詞の不定詞を使用する場合、不定詞の直接目的語が男性単数名詞であれば、例外なく不定詞は a 語尾の男性単数形であり、動詞は不定詞に一致して男性単数形となる。たとえば、「あなたは一冊の雑誌を読まなければならなかった」という文を上記の三つの構文を使って表現すると以下のようになる。

構文 a. *Āp kō ek risalah parhna tha.*

構文 b. *Āp kō ek risalah parhna para.*

構文 c. *Āp kō ek risalah parhna chahiye tha.*

以上、いずれの構文でも不定詞は不定詞の直接目的語 *ek risalah* (男性単数) に一致して *parhna* という男性単数形であり、動詞も、*tha*, *para*, *chahiye tha* と男性単数形である。

(10) 問題が生じるのは、不定詞の直接目的語が男性単数以外の名詞、すなわち、男性複数、女性単数、女性複数の名詞である場合である。ウルドゥー語、ヒンディー語の文法書では、このような場合、不定詞や動詞は不定詞の直接目的語に性数一致するとされているので、「あなたは二冊の本 (女性名詞) を読まなければならなかった」という文は、ウルドゥー語、ヒンディー語では以下のように表現されなければならない。

構文 a. *Āp kō dō kitabeñ parhñī thīñ.*

構文 b. *Āp kō dō kitabeñ parhñī parīñ.*

構文 c. *Āp kō dō kitabeñ parhñī chahiye thīñ.*

いずれの構文でも、不定詞はその直接目的語 *dō kitabeñ* (女性複数) に一致して *parhñī* という女性単数形となり、不定詞には女性複数形はなく、直接目的語が女性複数名詞の場合でも女性単数形の不定詞が用いられる

、動詞はすべて、女性複数の直接目的語に一致して、*thīñ*, *parīñ*, *chahiye thīñ* と女性複数形になる。

(11) ところが、話し言葉のみならず、書き言葉においても、不定詞の直接目的語が男性単数以外の名詞であっても不定詞が男性単数形になるような、以下に記したような、上記の原則を逸脱した文に出会うことは決して稀なことではない。

構文 a. *Āp kō dō kitabeñ parhna thīñ.*

構文 b. *Āp kō dō kitabeñ parhna parīñ.*

構文 c. *Āp kō dō kitabeñ parhna chahiye thīñ.*

(12) 以上のような、文法原則を逸脱した文について、これらの現象はウルドゥー語、ヒンディー語圏東部、特に東部地域の言語的・文学的拠点であるラクナウーで見られると記述する文法書がいくつかあり、もしそうであれば、ラクナウーの言語的・文学的重要性には大きなものがあるので、この現象は日本のウルドゥー語、ヒンディー語文法教育の場で、ラクナウー・ウルドゥー語、ラクナウー・ヒンディー語の地域的文法特性として教えなければならないことになる。

(13) この現象を個人の言語的嗜好と見做す文法書も存在し、もしそうであるなら、そのような言語実態が存在することを教えなければ、ウルドゥー語、ヒンディー語学習者は混乱することになるであろう。

(14) 今回の研究においては、以上のような文法原則を逸脱していると思われる文がどの程度用いられているのか、インドのウルドゥー語、ヒンディー語地域の、大学教員、大学生、文化人などエリート層に対してアンケート調査を行い、エリート層の文法規範意識を探った。具体的には、「あなたはこれらの本 (女性複数) を読まなければならなかった」という意味の文を以下の 4 パターンで示し、文法的に正しい (correct) か、誤り (wrong) か、許容できる (acceptable) か、のどれかを回答させるアンケート調査を行った。

文例 a. *Āp kō yeh kitabeñ parhna tha.*

文例 b. *Āp kō yeh kitabeñ parhna thīñ.*

文例 c. *Āp kō yeh kitabeñ parhñī thī.*

文例 d. *Āp kō yeh kitabeñ parhñī thīñ.*

(15) 文例 a. は、不定詞は男性単数形で、動詞は不定詞に一致して男性単数形となっている。

文例 b. は、不定詞は男性単数形であるが、動詞は不定詞の直接目的語に一致して女性複数形になっている。

文例 c. は、不定詞はその直接目的語に一致して女性単数形 - 上述のように、女性複数形の不定詞はなく、直接目的語が女性複数でも女性単数形の不定詞が用いられる になり、動詞は不定詞に一致して女性単数形となっている。

文例 d. は、不定詞はその直接目的語に一致して女性単数形になり、動詞は不定詞の直接目的語に一致して女性複数形になっている。

(16) デリーのウルドゥー語話者(16名)、東部地域アラハバード、バナーラス、ラクナウのウルドゥー語話者(28名)に対して行ったアンケートからは、以下のような結果が得られた(CはCorrect、AはAcceptable、WはWrong、UはUnansweredを示す。単位はパーセントで、小数点第2位以下は切り捨てた)。

デリーのウルドゥー語話者の回答

文例	C	A	W	U
a.	6.2	12.5	68.7	12.5
b.	25.0	31.2	37.5	6.2
c.	6.2	25.0	62.5	6.2
d.	81.2	18.7	0	0

東部地域アラハバード、バナーラス、ラクナウのウルドゥー語話者の回答

文例	C	A	W	U
a.	7.1	14.2	60.7	17.8
b.	10.7	32.1	39.2	17.8
c.	25.0	25.0	35.7	14.2
d.	64.2	25.0	0	10.7

(17) 以上の表から以下のことが確認できる。

文法書で標準的とされている、不定詞や動詞を不定詞の直接目的語に一致させる文例 d. を文法的に正しいとする回答が最も多かったが(デリーで 81.2 パーセント、東部地域で 64.2 パーセント)、意外なことに、これを文法的に正しいとせず、許容できる文と見做す回答がかなりあった(デリーで 18.7 パーセント、東部地域で 25.0 パーセント)。

不定詞を男性単数形のままにして動詞を不定詞の直接目的語に一致させる文例 b. は、東部地域では文法的に正しいとされている確率が高いと思われたが、文法的に誤りとする回答がかなりあった(39.2 パーセント)。

標準的とされている文例 d. 以外の文例を文法的に正しいとする回答や許容できるとする回答が少なからずあった。これは、この構文に関する文法規範意識に大きな幅があることを示している。

(18) 同様のアンケート調査を、ヒンディー語東部地域の中心都市バナーラスとパトナで、大学教員、研究者、学生のヒンディー語話者(57名)に対して行ったところ、以下のような結果が得られた。

東部地域バナーラス、パトナのヒンディー語話者の回答

文例	C	A	W	U
a.	7.0	28.0	54.3	10.5
b.	7.0	0	82.4	10.5
c.	40.3	43.8	7.0	8.7
d.	57.8	21.0	15.7	5.2

(19) この表から確認できるのは、以下のような点である。

標準とされる文例 d. を文法的に正しいとする回答が最も多かったが(57.8 パーセント) 文例 c. を正しいと答えた者が、40.3 パーセントもあった。

不定詞を男性単数形のままにして動詞を不定詞の直接目的語に一致させる形 東部地域、特にラクナウではよく見られる形と一部文法書で説明されている形 である文例 b. は、予想に反して、文法的に正しくないとする回答が非常に多かった(82.4 パーセント)。

(20) 以上の、ウルドゥー語話者とヒンディー語話者に対するアンケートの結果は、地域的な文法規範意識の差異ではなく、個々人の文法規範意識の多様性を示唆しているように思われる。アンケートの結果は、文例 d. のみが標準的で文法的に正しく、他の形は誤りである、と単純には言い切れない言語実態があることを明瞭に示している。

(21) 現地アンケート調査では、不定詞の用法に関連して、特殊動詞 *chahiye* の用法に関する文法規範意識も調査した。

(22) 特殊動詞 *chahiye* は、「～が必要である」という意味で、「S ko ~ *chahiye*」、「S には～が必要である」という構文で用いられ、「～」にあたる部分に名詞や不定詞が用いられ、これが文法上の主語となる。

(23) 動詞 *chahiye* は特殊な動詞で、人称変化はせず、単数形 *chahiye* と複数形 *chahiyeñ* の2種類の現在形しか存在しないが、複数形の *chahiyeñ* を用いず、単数形 *chahiye* のみを用いる例が見られる(ヒンディー語では、複数形 *chahiyeñ* の使用は標準的とはされていないが、ウルドゥー語では文法上の主語が複数であれば複数形 *chahiyeñ* を用いるのが標準的であるとされている)。これが地域的な文法の違いであるのかどうかを探るため、以下のような文例を用いてアンケート調査を行った。

文例 a. *Āp kō yeh kitabeñ parhna chahiye.*

文例 b. *Āp kō yeh kitabeñ parhna chahiyeñ.*

文例 c. *Āp kō yeh kitabeñ parhni chahiye.*

文例 d. *Āp kō yeh kitabeñ parhni chahiyeñ.*

(24) 文例 a. は、不定詞は不定詞の直接目的語が女性複数名詞であるにもかかわらず男性単数形で動詞は不定詞(男性単数名詞)に一致して単数形となっている。

文例 b. は、不定詞は男性単数形であるが、動詞は直接目的語(女性複数名詞)に一致して複数形になっている。

文例 c. は、直接目的語(女性複数名詞)に一致して不定詞は女性単数形 女性複数形が存在しないので女性単数形が用いられる、動詞は不定詞に一致して単数形となっている。

文例 d. は、直接目的語(女性複数名詞)に一致して不定詞は 女性複数形が存在しないので 女性単数形、動詞は直接目的語(女性複数名詞)に一致して複数形となっている。

(25) ウルドゥー語話者に対して行ったアンケートでは、以下のような結果が得られた。

デリーのウルドゥー語話者の回答

文例	C	A	W	U
a.	31.2	25.0	37.5	6.2

b.	12.5	25.0	50.0	12.5
c.	56.2	18.7	25.0	0
d.	62.5	18.7	12.5	6.2

東部地域アラハバード、バナーラス、ラクナウーのウルドゥー語話者の回答

文例	C	A	W	U
a.	28.5	32.1	25.0	14.2
b.	7.1	21.4	53.5	17.8
c.	57.1	25.0	17.8	0
d.	25.0	17.8	32.1	25.0

(26) 以上の表から確認できるのは、以下のような点である。

不定詞や動詞を不定詞の直接目的語に一致させる文例 d. が標準的な形とされているが、これを文法的に正しいとしない回答がかなりあった（東部地域では 32.1 パーセントもあった）。

不定詞はその直接目的語に性数一致するが、動詞には複数形 *chahiyeñ* を用いない文例 c. を文法的に正しいとする者が予想以上に多かった（デリーで 56.2 パーセント、東部地域で 57.1 パーセント）。

標準的とされている文例 d. 以外の文例を文法的に正しいとする回答や許容できるとする回答が少なからずあり、この構文に関しても文法規範意識に大きな幅があると言わざるを得ない。

(27) ヒンディー語話者に対して行ったアンケートの結果は、以下の通りである。

東部地域バナーラス、パトナのヒンディー語話者の回答

文例	C	A	W	U
a.	17.5	35.0	36.8	10.5
b.	1.7	12.2	73.6	12.2
c.	57.8	28.0	7.0	7.0
d.	36.8	24.5	31.5	7.0

(28) この表からは、以下のような点が確認できる。

ヒンディー語文法では、複数形の *chahiyeñ* を使うのは標準的とされていないので、文例 c. を文法的に正しいとする回答が最も多い（57.8 パーセント）。

ウルドゥー語文法では標準的とされる文例 d. は、文法的に正しいとする回答と文法的に誤りとする回答がほぼ拮抗している（36.8 パーセントと 31.5 パーセント）。

(28) 以上の、ウルドゥー語話者とヒンディー語話者に対するアンケート結果も、地域的な文法規範意識の差異ではなく、個々人の文法規範意識の多様性を示唆しているように思われる。アンケートの結果は、ウルドゥー語では文例 d. のみが、ヒンディー語では文例 c. のみが標準的で文法的に正しく、他の形は誤りである、と単純には言い切れない言語実態があることを明瞭に示している。

(29) 現地アンケート調査では、標準的とされる形以外を文法的に正しいとする回答が、地域的差異としてではなく、話者の文法規範意識の多様性として一定の傾向性は示す

ものの、予想以上に得られた。以上の研究結果から、「～しなければならない」という構文において他動詞の不定詞が用いられるときは、不定詞と動詞は不定詞の直接目的語に性数一致する、という原則だけが文法的に正しいと考えられているわけではないという、現地の言語実態を踏まえたウルドゥー語、ヒンディー語の文法教育を行う必要があると思われる。

(30) この研究をさらに発展させ、より確度の高い結論を得てウルドゥー語、ヒンディー語の文法教育を改善するためには、さらに現地アンケート調査を行うとともに、以下の点に留意することが必要であろうと思われる。

歴史的に有名な文学作品に現れる不定詞や動詞 *chahiye* の用例を、作者の出身地や生活言語圏などに留意しつつ、できるだけ収集し、歴史的な変化や地域的な特徴がないか、確認する。

インドで現在発行されているウルドゥー語やヒンディー語の新聞、雑誌および学校で使用されている教科書からも用例を採取し、最新の言語実態を確認する。

「～しなければならない」という構文以外たとえば、「～することが重要である」、「～することを望む」等で用いられている不定詞の用法についても用例をできる限り収集する。

(31) アンケート調査では諸個人の言語環境の詳細（両親の言語、出身地の言語、居住地の言語、教育を受けた言語等）については調査しきれなかった部分があるが、本研究によって、ウルドゥー語、ヒンディー語文法の最重要項目に含まれる、不定詞や特殊動詞 *chahiye* の用法に関して、現在の文法教育では曖昧にされている点、言語実態と乖離している点を是正する糸口はつかめたのではないかとと思われる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

松村 耕光、「ウルドゥー語における不定詞の名詞的用法について」、日本南アジア学会第26回全国大会、広島大学、2013年10月5日。

西岡 美樹、Rajesh Kumar、「ビハーリー方言にみられる標準ヒンディー語の影響 形態・統語的特徴に焦点をあてて」、日本南アジア学会第25回全国大会、東京外国語大学、2012年10月6日。

Miki Nishioka, "Conflicting Patterns of Agreement in Hindi-Urdu", The Tenth International Conference on South Asian Languages and Literatures, Russian State

University for the Humanities, 6th July,
2012.

〔図書〕(計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松村 耕光 (MATSUMURA, Takamitsu)

大阪大学・言語文化研究科・教授

研究者番号 : 60157352

(2) 研究分担者

西岡 美樹 (NISHIOKA, Miki)

大阪大学・言語文化研究科・講師

研究者番号 : 30452478